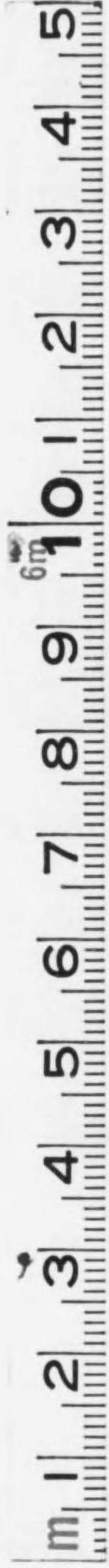


始



山岡直道編

獨文初歩

文法と作文

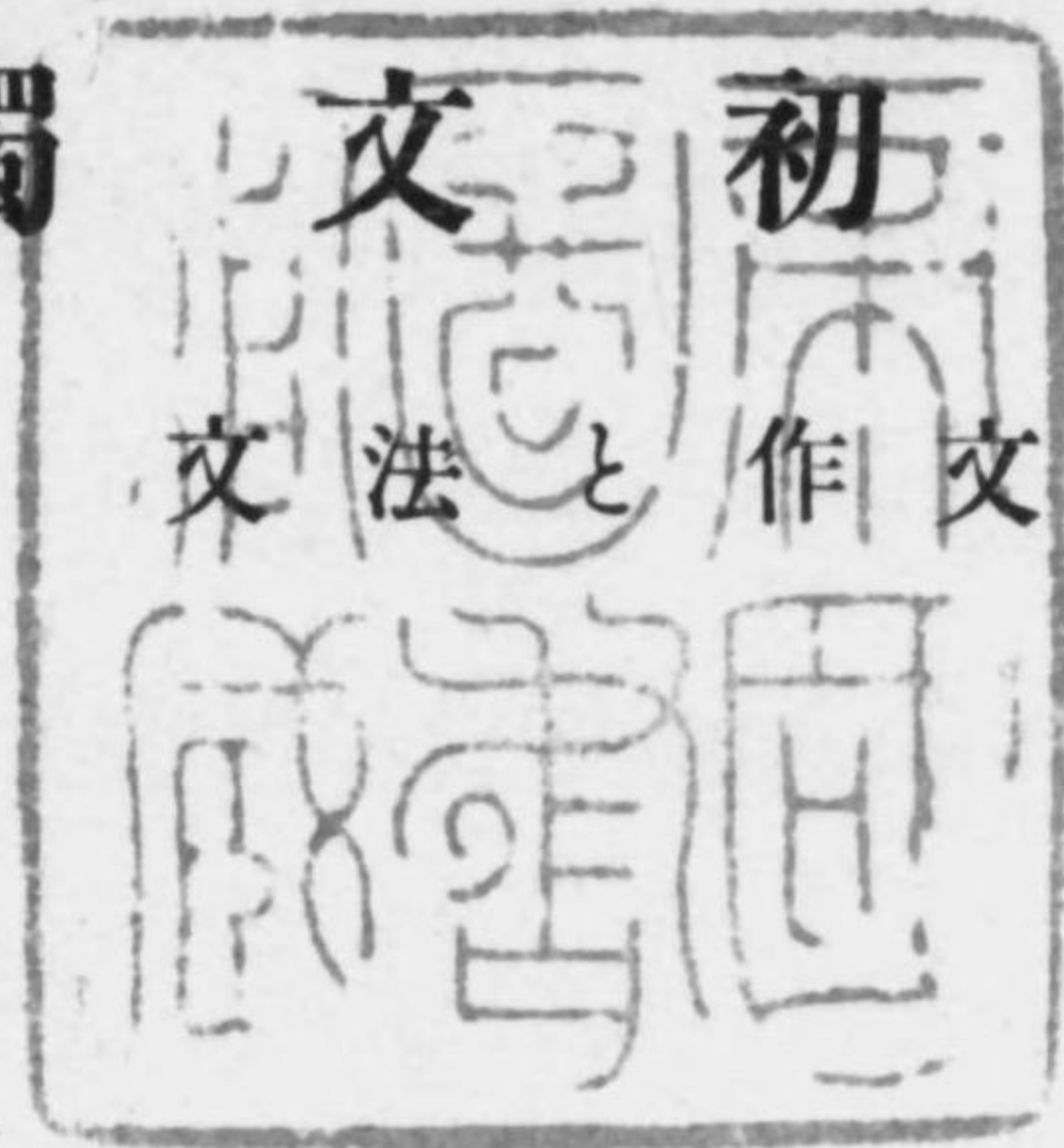


東京南山堂書店發行

417
250

特252
920

獨 文 初 步



山岡直道編



東京 南山堂書店 發行

序

本書は、簡単な文法を一通り終へた後、或は之と併行して初學年の第二學期頃使用し、獨作文の練習によつて文法の知識を確實にする爲に編んだものである。併し同程度の獨習書としても利用し得るであらう。文法に關しては、文法一般の事項は文法教科書に譲り、特に初歩の學生に必要と考へられる數項に就いて稍詳しい説明を附けた。教科書として使用される場合は、教授諸氏に於いて、適宜補うて頂けば尙結構である。編者の意圖は、獨作文の熟達といふよりは、むしろ獨文の正確な理解を助ける所にあるが、尙不備杜撰の點の少くないことを恐れてゐる。諸氏の叱正を賜はつて、一層好きものにしたいと念願する次第である。尙本書は元六高教師 J. Körber 氏に負う所の多いことを記してここに感謝の意を表しておく。

昭和十六年初夏

編者識

目 次

	頁
第一章 語順に就いて	1
第二章 冠詞に就いて	3
第三章 Es の用法に就いて	10
第四章 Sein, liegen, stehen 等に就いて	12
第五章 過去及現在完了に就いて	18
第六章 代名詞に就いて	25
第七章 関係文章に就いて	35
第八章 Daß..... 及び不定法に就いて	45

第一章 語順に就いて

1. Ich schicke meinem Freund meine Photographie.
Ich schicke meine Photographie meinem Freund.
Meinem Freund schicke ich meine Photographie.
2. Ich schicke sie meinem Freund.
3. Ich gehe heute abend dorthin.
4. Der Dampf setzt die Maschine in Bewegung.
5. Er hat dieses Buch nicht.
Er hat nicht dieses Buch.
Nicht dieses Buch habe ich gekauft.
6. Es ist, wie sein Bruder, nicht fleißig.
Er ist nicht, wie sein Bruder, fleißig.

a) 獨逸文に於ては、獨立文の場合(副文章の場合は別に述べる)は、疑問文及び其外二三例外の場合を除いて、定動詞は常に第二位を占めるのが通則である。それ故、主語以外の品詞が先頭に立つ時は、上例 1. の最後の文の如く、定動詞は主語の前に来て、やはり第二位を占める。尙、其他の語順に關して、二三の注意を記す。動詞が三格と四格の二つの補足語をとる場合には、三格が四格に先立つこと日本語の場合と同様である(上例 1. 最初の文を参照)。併し、此の例に於て、*meinem Freund* を強調する必要のある時、即ち他の人にではなく、特に友達に送るといふことを表さうとする時は之を後に移す。それを更に強くいふならば最後の文の如く文頭に出す。次に、2. の例の如く、代名詞と名詞の場合は格に關係なく代名詞を先にする。尙、一般に獨逸文に於ては、短

い語を先におく傾向がある。又、時の副詞と所の副詞のある場合は、日本語で「何時、何處で」といふのと同様時の副詞が先に立つ。

b) 次に、分離動詞の分離前綴は文末におく(例へば、Ich stehe jedem morgen um 5 **auf**) のと同様に、動詞と共に一概念を成す語は文末におく。上例 4. はその一例であるが、其他 nach Hause gehen, ins Kino gehen, Platz nehmen 等熟語動詞及び之に類するものは皆かくの如き順序となすのが通則である。

c) 又 nicht の位置も注意を要する。動詞を否定する時——即ち文章全體を否定する時は nicht を能ふ限り後におく、即ち上例 5. の最初の文章の如き場合は文末に来る。但し Er hat dieses Buch nicht gekauft. の如き場合は、必ず文末におくべき語の前に来る。併し 5. の第二文の如き場合は、dieses Buch を特に否定する(他の本は持つてゐるかも知れぬが此の本は持つてゐない)ことになる。それを更に強調すれば 5. の最後の文章の如くにも書ける。又 6. の文章の如く wie の前に nicht をおく場合と、後におく場合とでは意味が違つて来る。即ち前者は「彼の兄弟と同様彼も勤勉でない」のであり、後者は「彼の兄弟と違つて彼は勤勉でない」のである。

和文獨譯練習

次の語句を利用せよ。

zur Verfügung stellen	nicht immer
zu Hause	aus solchem Grund
verwerfen	dieser Herr
kennen (wissen では?)	

1. 私は友人に繪葉書を送る。
2. その繪葉書を私は友人に送らう。

3. 君はお母さんにその寫眞を見せねばならぬ。
4. 私は彼を私の叔父に紹介する。
5. 彼は明朝こちらに来るでせう。
6. 私は昨日停車場で彼に逢ひました。
7. 私は今日家へ歸ります。
8. 直ぐ着席して下さい。
9. 私は彼にその金の一部を提供した。
10. 私はいつも在宅するとは限らない。
11. 私はその本を持つてゐない。
12. 私は雑誌は讀まない。併し新聞は讀む。
13. 私はそんな理由で君を非難するのではない。
14. 私は君のいふことはわからない。
15. 私は此の方(?)を知りません。
16. 彼は私と同様獨逸語を話せません。

第二章 冠詞に就いて

I

1. Vor der Haustüre steht **ein** Kind. **Das** Kind bringt **einen** Brief.
2. Ich habe **ein** schönes Ölgemälde.
3. Ich schenkte ihr **ein** Ölgemälde.
4. **Das** Ölgemälde schenkte ich ihr.

冠詞はどの文章にも出て来て、規定詞中最も屢々用ひられるものであるが、又最も誤り易い一つである。初學者は、冠詞といへば大抵定冠詞を用ひるやうに思ひ易いが、之は誤で、むしろ不定冠詞を用ひる場合が多いのである。

或一個の物(或は人)に就いて話し、それが他にも多くある中の一つである場合、不定冠詞を用ひる。上例に於いて、**ein Kind** はそれが單に一人(單數)であることを示すよりは、多くある中の或一人であることを示すのである。**einen Brief** も亦その通りである。又形容詞が附いてゐても同様であり、「何々を持つてゐる」等の **haben** の目的語には、それが單數である限り、不定冠詞をとる場合が多い。併し、**Das Kind bringt.....** の場合は、既に定まつてゐる子供である。故に定冠詞を用ひる。言葉を換へて云へば、最初に紹介するものは不定冠詞、既に紹介したものは定冠詞を用ひるともいへる。若し、例 4. にある如く、初から **Das Ölgemälde schenkte ich.....** とする時は、「例の油繪」といふやうな場合である。

II

1. **Die Sonne** ist viel größer als **die Erde**.
2. **Der Fuji** ist **der** berühmteste Berg Japans.
3. Wer ist **der** jetzige Präsident von Amerika?
4. Haben Sie **die** heutige Zeitung gelesen?
5. Weil **das** Examen eben geendet hat, sind heute **die** Straßen **der** Stadt voll von Studenten.
6. Ich wollte eine Armbanduhr kaufen und fragte nach **dem** Preis.

a) 一般に、論理上唯一つだけあるものは定冠詞を用ひる。**die Sonne**, **die Erde** 等がそれである。又今のアメリカ大統領は唯一人しかない。最上級の形容詞や順序数には同様の意味で定冠詞を伴ふ。例へば **das schönste Land**, **der erste (Tag) April**, **die meisten** (複數) 等。尙、固有名詞の内、山の名、川の名には定冠

詞をつける。山の名は、男性 (**der**) 川の名は、ヨーロッパの川は男性のもの(例へば **der Rhein**) と女性のもの(例へば **die Donau**) とあり、ヨーロッパ以外の川は大部分男性とする。國名は大多數中性であつて冠詞を附けぬ、(**Japan**, **Amerika** 等) 但し少數の女性の國名、(**die Schweiz**) には定冠詞を付ける。大日本、大東京の如きも定冠詞を附けず **Groß-Japan**, **Groß-Tokyo** 等。但し、**die Vereinigten Staaten**, **das moderne Japan** 等、普通の形容詞を伴ふ場合は定冠詞を伴ふこと一般の固有名詞と同様である。

b) 複數の名詞に冠詞を伴はぬ場合は、多く存在するうちの或る不定の数だけあることを現す。(上例 5. の **Studenten** はその一例) 複數の名詞に定冠詞 **die** を付ける場合は、その場合に考へてゐる總てのものを意味する(上例 5. の **die Straßen**)。

c) 上例 5. の **das Examen** は、I の 4. の場合と似て、今行はれた試験に定つてゐるが爲であり、又 6. の **dem Preis** もその腕時計の値段に定つてゐる故に定冠詞を用ひる。

III

1. **Das Eisen** ist das nützlichste von allen Metallen.
2. Dieses Land bringt Eisen, Kupfer und Nickel hervor.
3. **Der Mut** ist eine rühmliche Eigenschaft.
4. Dieser Mann hat großen Mut.

抽象名詞と物質名詞が各々その全體を表すものとして用ひられた場合定冠詞をとる。かかる場合は主語(又は二格)として用ひられる例が多い、例へば **das Eisen** ist..... といふ時、凡そ存在する限りの鐵についていふのであり、又 **Der Mut** ist eine rühmliche Eigenschaft といふ時の勇氣は、一般にすべての勇氣といふ性質に就いていふのである。**das Gute** も同様である。併し、若

し物質名詞と抽象名詞が部分的な概念として用ひられる時は冠詞は伴はぬ。(上例 2. 及び 4.) それ故、此の種の名詞が客語となる時、haben, sein, es gibt 又は形容詞、前置詞等の後に來る時は冠詞を作はぬ。又 etwas Gutes 等も此の部類に屬する。

IV

1. Der Mann hat **Frau und Kind** verloren.
2. Weder **Gut noch Geld** konnte meinen Freund retten.
3. Er wußte **vor Freude** nicht, was er tun sollte.
4. Als Vater war er nicht musterhaft.
5. Ich bin Mitglieder dieses Vereins.

其他に冠詞を伴はぬ場合に次の如きものがある。二個以上の名詞が對句の如く用ひられる時(上例 1. 及び 2.) 熟語又は熟語に類した句(例へば 3. の如き)に於いて、又上例、4. 及び 5. の如く、資格、職業を表す場合。冠詞の用法に就いて詳説すれば、以上の他に種々な場合があるが、初歩の段階に於いては大體以上の説明を心得ておけば、略間に合ふであらう。尙上例 2. の meinen Freund に関して附加へておけば、mein Freund と einer meiner Freund との関係は der Freund と ein Freund との関係と同様である。

和 文 獨 譯 練 習

次の語句を利用せよ。

- | | |
|-----------------------------------|-----------------------|
| sich (3. Fall) aneignen & 4. Fall | überströmen (分離動詞) |
| riechen nach..... | entsprechen & 3. Fall |
| | Augenzeuge sein |

schulfrei haben	ein Ding ersten Ranges
ein Sturm wütet	(ohne Artikel!)
etwas erweist sich als schwer	das Wahrzeichen
in Verlegenheit geraten	Kriegsindustrie
man versteht anzuordnen	die Verordnung eines
(mit etwas) weit kommen	Arztes
einen Aufschwung nehmen	das Schlafengehen
in sich bergen	der Umfang einer
unsere Schule feiert...	Berufstätigkeit
halten für (形容詞又は名詞)	erstaunlich
eine Überschwemmung	in der Elektrischen (具體的
bewirken	に電車の一つを考へるので
etwas erfordert Umsicht	なく、抽象的に云ふのであ
ein Autounfall	るから定冠詞を用ふ)
ein Stadtplan	mit Geschmack
ein Anprobefräulein	fälschlicherweise
Abessinien (Äthiopien)	nicht zu reden von...

1. 日本は大抵のヨーロッパ人の眼には、未だやはりお伽話の國である。
2. 私は今朝君のお父さんから手紙を受取つた。手紙は次のやうな内容のものだ。
3. ラヂオは二十世紀の最も驚嘆すべき發明の一つだ。
4. 勤勉な生徒たちは三年で、或程度まで文學的なそして哲學的な教養を獲得する。
5. 小さい次郎は電車の中で母の胸にもたれて眠つてしまつた。
6. 伊太利はエチオピアを征服してその植民地にした。
7. 富士山は外國人には日本の象徴として認められてゐる。

8. 田舎の人々には東京を誤つて樂園と考へてゐるものがある。
9. 此の室の中は煙草臭い。
10. 獨逸の Not lehrt beten に相應する日本の諺がある。
11. あなたは多分和獨辭典をお持ちですね、私はそれで單語を二つ三つ引きたいのですが。
12. 大きな都會には殆んどすべて百貨店があります。
13. 熱は暖い物體から冷い物體に傳はる。
14. 外相の突然の退職の報知は大きな驚愕を引起した。
15. NとMとは大層勤勉な生徒だ。彼等はそのクラスで最もよい生徒たちだ。
16. 四錢切手をお持ち合せですか。私は出す手紙が一通あるのですが。
17. 此處にあるのが私の祖父母の家で、隣に私が青年時代を送つた家がある。
18. 先月は十日と二十七日に學校が休みであつた。
19. 自尊心と傲慢とは別物である。
20. その様な企ては大きな注意を要する。
21. あの晩に恐ろしい嵐が荒れ狂ひ、そして劇しい雨の爲、市の多くの街に洪水が生じた。
22. 鐵は大層有益な金屬である。銅も亦最も有益な金屬の一つである。
23. 三人の墜落した學生の死體の發見は、困難な仕事であることが分つた。
24. 空には満月があり星が光つてゐる。非常に美しい夜だ。
25. 私が昨晚町を通つた時、自動車事故を目撃した。
26. 私は此の二枚の町の地圖の内一枚を君に上げてもいい。君は大きい方が欲しいか小さい方が欲しいか。

27. あなたは市役所を捜しておいでですか、それはすぐ見つかります。左側三つ目の大きな建物です。
28. 人は既に度々水銀から金を獲ようと試みた。
29. 此の日曜日には A 教授が江戸時代の文學に就いて放送した。
30. 彼女はその兩親の澤山の質問で大いに當惑してしまつた。
31. 私の友人の妹は花を大層趣深く生けることを心得てゐる。
32. 悪人と雖もなほ極樂に往く、まして善人に於ておやといふ觀鸞の言葉は深い眞理を含んでゐる。
33. 北海道最大の川、石狩川は又その河口でとれる鮭の爲に有名である。
34. 明治時代の最も著名な文學者の一人である二葉亭は、歐羅巴からの歸途印度洋に投身した。
35. 醫者の忠告に従つて私は毎晩就眠前に冷水を飲む。
36. 次の月曜日に私の友人の一人が大阪から來る。私は彼の爲に借家を見つけねばならない。
37. 軍需工業が好況を呈したので、アルミニウムは益々需要が多くなる。
38. 女性の職業の範圍は我國に於てもかなり擴大された。女タイピスト、バスの女車掌、マネキン嬢等がある。
39. 此の月の十九日に我校は第三十八回の創立記念日を祝ふ。
40. 彼はすべてに運が好い。昨日も彼は寫眞展覽會で賞を獲て美しい本を一冊貰つた。
41. 今日の日本は第一流の強國である。百年前にはなほ東亞の一つの小さな島國であつた。

第三章 Es の用法に就いて

I

1. Wer steht dort? — Es ist ein Engländer.
Was liegt da? — Es sind Bücher.
2. Es ist mein Vater, der mir diese Taschenuhr gab.
3. Es ist gut, daß du immer früh aufstehst
Es ist schwer, diese Frage zu lösen.
4. Er ist dumm. Er war es immer, und wird es auch
sein Leben lang bleiben.
Er behauptet mein Freund zu sein, ist es aber nicht.
5. Es sind zwei Löwen in diesem Tiergarten.
Es gibt Löwen in Afrika, aber nicht in Europa.
6. Es war einmal ein König.
Es irrt der Mensch, solange er strebt.

上例 1. の如き場合に、日本語の「それ」若しくは「あれ」に應ずるものは er, sie 等ではなく、次の名詞の性、数の如何に關せず es である。但し特に強い調子でいふ必要がある時は das も用ひる。又上例 2. は Mein Vater gab mir diese Taschenuhr. としても意味に於ては大差はないが、例文の如くすれば此の懐中時計を呉れたのは父である。といふやうに mein Vater を強調することになる。此の場合の關係代名詞は、名詞(ここでは mein Vater)の性、数によつて決定される。又此の名詞が代名詞であれば、es は後に置かれる。例へば、Er ist es, der es gesagt hat. 例の 3. は daß..... の副文章と zu を伴ふ不定句とを es で置換へたものである。又 es は、形容詞其他種々なる文の要素を受け

ることがある。上例 4. は、一つは dumm を、他は mein Freund を受けてゐる。

次に、es gibt, es ist (sind) は共に、物の存在を表し、英語の there is (are) に應ずるものであるが、その區別は稍々難かしい所がある。es gibt は、自然の理により、或は一般の習慣により存在(或は發生)する意味があり、es ist は、謂はゞ人爲的に限定された範圍を前提とする。上例 5. に於いて、此の動物園に二頭のライオンが居るのは、自然に居るのではなく、人爲的に居るのであり、アフリカにライオンが居るのは自然の結果であるが如くである。又、es gibt の後の名詞は四格であり、決して定冠詞を伴はぬ、必ず不定冠詞か、さもなくば、無冠詞である。更に es は所謂文法上の主語として、上例 6. の如く文の先頭に立つことがある。それは本來の主語(名詞)又は動詞を重くする爲である。

II

1. Es regnet, schneit, donnert, dunkelt u.s.w.
2. Es ist warm. Es wird (ist) Abend.
3. Es hungert mich. (Mich hungert.)
4. Es geht ihm gut. Wie geht es Ihnen?
5. Es handelt sich immer um Geld, wenn du zu mir kommst.
6. Es kommt darauf an, wie man das tut.
7. Er hat es gut.
8. Er hat es weit gebracht.

自然現象、時刻等を表すには es を主語とすることは大體英語と同様である。(上例 1.—2. を参照)。3. の如き場合も、身體に

於ける自然現象を現すともいへる。此の場合 Mich を先に出して es を省略することもある。又若し Ich hunger. とすれば私は絶食するといふ意味になる。更に上例 4.—8. にその例を示したやうに、es を主語又は補足語とする熟語 (或は熟語に類するもの) はかなり多い。

第四章 Sein, liegen, stehen 等に就いて

I

1. Mein Großvater war eine Zeit lang im Krankenhaus; jetzt ist er zu Hause und liegt im Bett.
2. Die Stadt liegt am Rhein.
3. Am Brunnen vor dem Tore, da steht ein Lindenbaum.
4. Es steht heute nichts interessantes in der Zeitung.
5. In dem Schloß saß einst ein stolzer König.

或物の存在する場所、位置等を示すには sein と、所の副詞 hier, dort, oben 等又は前置詞と名詞、例へば上例の 1. の如く im Krankenhaus, zu Hause 等を用ひる。但しこの場合、sein の代りに liegen, stehen を用ひることが屢々あり、又其他に sich befinden, sitzen, zu finden sein 等を用ひることもある。殊に都市、其他土地の位置等を表すには liegen を用ひることが多く、又上例 4. の如き場合、即ち「書いてある」といふやうな場合 stehen がよく用ひられる。

II

1. Ich bin in großer Eile; einige Briefe sind sofort zu schreiben und ein Paket ist auf die Post zu tragen. Glücklicherweise sind das lauter Dinge, die leicht auszuführen sind.
2. Das ist von großer Wichtigkeit.
3. Trotz seiner Krankheit ist er immer guten Mutes.
4. Die Wohnung steht jetzt leer.
Er steht im besten Mannesalter.
5. Die Zahl ist groß.
Ich habe heute viele Besucher.
In Japan sind Erdbeben sehr häufig.

a) 或物の性質や状態を表すには、sein と形容詞とを以てする外に、前置詞を伴つた名詞を用ひることも屢々ある。Ich bin eilig といはずに — in Eile といひ、又上例 2. の如く von Wichtigkeit. 又 Seien Sie ohne Sorge! 等。又かなり稀ではあるが抽象名詞の二格を用ひることもある。(上例 3.)

b) 又、sein と zu を伴ふ不定法とが結びつく場合がある。上例 1. の Einige Briefe sind zu schreiben 及び Ein Paket ist — zu tragen は müssen geschrieben werden, muß getragen werden の意味であり、又 Die Dinge sind leicht auszuführen の場合は können leicht ausgeführt werden の意味である。即ちいづれも受働の意味であるが、日本語では受働のやうにはないのが普通である。尙、上例 1. の lauter は「—ばかり」の意味で、laut の語尾變化と混同せぬ様注意せねばならぬ。又、此の

様な、状態等を表す場合にも sein の代りに stehen を用ひることも稀ではない。(上例 4.)

最後に「何々が多い」といふ日本語を獨逸語にする場合は注意を要する。上例 5. を参照せよ。之等を、例へば、Die Zahl ist viel. Besucher sind viel. Erdbeben sind viel. と書くことは誤である。

和文獨譯練習
(第三章を含む)

次の語句を用ひよ。

Eine Zahl (ein Ding) beträgt 20, 30 etc.	von Haus aus= von Natur aus
...ist (k) ein Vergnügen	Nordostjapan (冠詞を附せ ず)
...ist von Wichtigkeit	
ein Komponist (Schauspie- ler) ist beliebt	Groß-Tokyo も同様 20=zwanzig
...ist kriegerisch veranlagt	20.= (der, die, das)
...ist überzeugt von etwas	zwanzigste
...ist imstande	das hiesige Krankenhaus
...ist an der Arbeit	das stundenlange Sitzen
Es war einmal... 昔昔(御伽 話の始)	der gestrige Sturm
ein Schüler fehlt	der allgemeine Gesund- heitszustand
man gibt einen Film	eine bewegte See
etwas mit einrechnen	bewaldete Höhen (Hügel)
einteilen in + 四格	ein außerordentlicher Pro- fessor (a. o. Professor)
auf einer Insel	
vom...Standpunkt aus	die olympischen Spiele

die Kulturhöhe	das Waschwasser
ein Chefarzt	eine Sommerfrische
die Leistungsfähigkeit	das Wohlergehen
die Urheimat	nichts anderes als

1. 富士山は日本の一番高い山ではない。一番高い山は新高山である、それは臺灣にある。
2. 獨逸語と英語は二つの類似した言語である。
3. パリはフランスの精神的又藝術的生活の中心である。
4. 大東京の人口は六百萬に及ぶ。
5. 私の伯父は大層器用な外科醫である。
6. 齒醫者の待合室で何時間も坐つてゐることは決して愉快ではない。
7. 労働者の幸福は國民にとつて重要なことである。(ein Volk 或は die Völker)
8. 蝙蝠は飛ぶ。あれは併し決して鳥ではなく、哺乳動物である。
9. 此の本は三部に分れてゐる。
10. 箱根は有名な避暑地である。
11. 今日はいくらか寒い方だ。(Heute を先に出して「昨日よりは」の意を暗示する) 手洗水が凍つた。
12. ギリシヤはオリンピック競技の發祥地である。
13. 私の友人は喘息持ちだ、僅二三歩の後にはもう息が切れる。
14. 博物館は毎月曜日は閉館される、けれども日曜日には開かれる。
15. 私の友人は残念なことに餘り健康ではない、それにも拘はらず彼は非常に勤勉で、一度も學校で缺席したことがないのは感心だ。
16. 日本は古い文明國で、そして今日では強國である。

17. 私はお前の無罪を確信してゐる。
18. 之は君が未だ見たことのない寫眞だ。ここに居るのが僕の兄弟たちで、その前の子供は僕の甥だ。
19. 日本人は獨逸人のやうに、元來尙武の氣質がある。
20. 私の故郷の村は四方に森の茂つてゐる丘に取巻かれてゐる。
21. 東京と京都との距離は 513 キロメートルに達する。
22. 私の辭書は一體どこにあるのか、——あすこの床の上にある。
23. 實に (so) 澤山の人間が習慣の奴隸である。
24. 日本人はその鄭重なことで有名である。
25. 地球上で一番高い山はアジアにある。
26. 一般の健康状態の、一國民の文化の高さに對する意義は未だ十分に認識されて居らぬ。
27. アルコール問題は、唯に健康上や道德上の立場からのみでなく、經濟上の立場からも亦觀察しなければならぬ。
28. 仙臺は大學都市で、又東北日本の文化の中心である。
29. あなたは遅刻した、汽車はもう發車した。
30. 昨日の暴風雨の結果海は今日は非常に荒れてゐる。
31. ラヂオは二十世紀の偉大な發明である。
32. N は最初は小學教師であつた、次に新聞通信員であつた、今は有名な作家である。
33. 此の統計には疑はしい場合は含まれてゐない。
34. 名譽は軍人の最高の寶である。
35. 彼の病氣は簡単な風邪に過ぎない。
36. 私の兄は商人で弟は軍人だ。
37. 彼の到着は此の小さい田舎町にとつては、一大事件であつた。
38. それはよい考だ、それはお前に與へ得る最善のものだ。
39. 映畫館は今晚大入りだ、有名な獨逸映畫を上映してゐるのだ。

40. 此の本はどの本屋でも求められる。
41. いつの時代にも貧乏人と金持が居た。
42. 此のクラスには、全く立派に獨逸語を話す生徒がいくらかゐる。
43. 彼は簡単な獨逸文をつくることが出來ない。
44. 私の叔父は京都大學の助教授である。
45. 日本人は好んで獨逸音樂を聴く、殊に Beethoven は好かれてゐる。
46. 北海道には、本州に見出されない植物が若干ある。
47. 二三ヶ月前に父は歐洲に行つた、彼は今佛蘭西にゐる。
48. 今日世界には尙僅かの帝國しかない。
49. 昔々浦島太郎といふ名の漁夫がゐた。
50. 私のナイフがどこにも見つからぬ。
51. 此處の病院の醫長として、叔父は非常に人望のある人物である。
52. 珈琲と茶は食料品でなく嗜好品である。
53. 新聞に何か新しいことがありますか。
54. 私の従兄の一人は裁判官で、随つて官吏です。
55. 此の世の中で正に人間程變り易いものはない。
56. Madagascar には古代の動物や植物がある。
57. 日光は栃木縣にある、そこには日本で最も華麗な社がある。
58. 星の數は物凄く多い。
59. 門の前で話してゐるのは誰だ。——あれは弟とその友人だ。
60. それは眞實のやうに見える、併し實はさうでない。
61. 彼をして指導者たらしめたものは、彼の知識ではなく彼の人格である。

第五章 過去及現在完了に就いて

1. Gestern Nachmittag hatte ich viel zu tun. Zuerst machte ich meine Schularbeiten, dann ging ich auf die Post, wo ich einige Briefmarken kaufte. Hierauf besuchte ich mehrere Freunde, bei denen ich ziemlich lange blieb. Als ich endlich nach Hause kam, war es schon spät.
2. Gestern Nachmittag habe ich seit langer Zeit wieder einmal das hiesige Museum besucht. Dabei habe ich auch meinen Freund getroffen.
3. Ich bin heute früh auf der Straße unvermutet meinem Onkel begegnet.
4. Im vorigen Sommer habe ich eine Reise nach Mandschukuo (nach Charbin) gemacht.
5. Das Schiff ist gestern mit Verspätung in Beppu eingetroffen.
6. Sind Sie schon in Hokkaido gewesen?

a) 過去を用ひる場合は、心で過去に身をおいて、當時のあらゆる出来事を描く場合、即ちその記述、又、屢々異なつた時に起つたいくつかの出来事を記す場合である。例へば hatte, machte, ging, kaufte 等 (例を見よ)。異つた時を表すには上例の如く zuerst, dann, hierauf, und 等を用ふ。其他、過去に於て好んで用ひられる副詞には、damals, ferner, sodann, außerdem, später, in jener Zeit 等がある。いくつかの出来事を記す場合、

屢々主文章を結合して例へば , bei denen ich blieb (關係代名詞); , als ich nach Hause kam (時の副文章) 等と書く、副文章に於ては動詞は文末におく。

b) 現在完了は、現在の立場から過去を眺め、個々の過去の出来事を記す場合、例へば ich habe besucht. 或は同時に起つた二つの事件を記す場合、例へば dabei habe ich..... getroffen に用ゆる。Gestern, vorgestern, letzte Woche, im vorigen Sommer (Winter, Jahr), am letzten (vorigen) Samstag, seitdem, bis jetzt, neulich, kürzlich 等は現在完了と共に屢々用ひられる副詞である。殊に neulich は最近の一定の日を意味するから、現在完了と共に用ひられ、決して現在と共に用ひられぬ。

c) 現在完了は大抵の場合 haben と過去分詞とでつくる。殊に動詞が四格の目的語を伴ふ場合 (即ち他動詞) に於て然りである。例へば Ich **habe** meinen Freund getroffen. 此の點で注意すべきことは „be —“ といふ前綴を以て始る動詞は悉く四格を支配し、従つて完了形は haben をとる。„er —“ の前綴を以て始る動詞は三格と四格をとる場合も往々あるがやはり完了形では haben をとる。併し、自動詞中で全體の運動、移動等を表すものは sein をとる、例へば ist eingetroffen, sind Sie gewesen 等、又 begegnen (三格支配) も之に屬す、即ち上に記した規則の稀な例外である。かゝる自動詞は四格を支配することはない、所謂時の四格 (例へば letzte Woche) は動詞の構成には關係がない、それ故、完了形に於て sein を採る動詞と共に用ゆることもあるのは勿論である。

d) 日本語の過去、又、「ことがある」は屢々獨逸語の現在完了によつて現される、例へば Haben Sie schon den neuen Ufa-Film gesehen? 殊に日本語の「行つたことがありますか」は Sind Sie schon in — gewesen? で現すことに注意せよ、従つて

否定の答は Nein, ich bin noch nicht (或は noch nie) dort gewesen. である。此の場合 gehen 等を用ひない。

e) Wo? の問に對しては、國、都會などの名の前には前置詞の in が来る。例へば in Beppu, in Hokkaido. Wohin? の問に對しては、國、都會等の名の前には通例 nach が来るが、他の名詞の場合には四格支配の in が来る、例へば nach Mandschukuo reisen. nach Charbin reisen. 併し、in die Stadt gehen, in die Schule gehen 等、或目的地に向つての運動を表す動詞は通例 Wohin? の問に關するものであるが、例外的に ankommen, anlangen, eintreffen は Wo? の問に關する、例へば in Beppu eintreffen.

練 習 問 題

次の文章の動詞を適當な過去の形 (即ち過去形又は現在完了形) に改めよ。

1. An jenem Tage (abholen, 分離動詞) ich meinen Freund an der Bahn. Wir (einkaufen, 分離動詞) dann sofort für den Abend Tee und Zucker, Brot und Butter.
2. Schon in der Nara-Periode (haben) Japan viel Verkehr mit China.
3. Gestern Abend (begegnen) ich meinem Freund zufällig auf dem Bahnhof.
4. (Sein) Sie schon in Kyoto? — Ja, ich (sein) schon oft dort; ich habe einige Bekannte dort.

5. Bis heute (hören) ich noch nichts von ihm. Ich hoffe, daß er wohlbehalten an seinem Bestimmungsort (anlangen).
6. (Besuchen) du einmal Herrn N.? — Nein, diesmal noch nicht. Ich (sehen) ihn das letzte Mal, als ich ihn unvermutet in Ikaho (treffen).
7. Sogleich nach meiner Ankunft (nehmen) ich am Bahnhof ein Taxi und (fahren) in die Stadt, um zuerst meine Geschäfte zu erledigen, bevor ich meinen Freund (aufsuchen),
8. Zur Zeit, als Mituhide Nobunaga (ermorden), (belagern) Hideyosi das Schloß von Takamatu.
9. Gestern (erhalten) ich von meinem Freund eine Karte aus Berlin, wohin er vor einigen Monaten (verziehen).
10. Neulich (begegnen) ich seiner Schwester; wir (unterhalten) uns lange über ihn.
11. Es (schneien) diesen Winter wenig. Wir (haben) deshalb bis jetzt auch noch wenig Gelegenheit zum Skilaufen.
12. Heute (arbeiten) mein Nachbar den ganzen Tag auf dem Feld.
13. Ich (lesen) schon einige deutsche Romane, aber noch keine Dramen.

14. (Hören) Sie schon eine Symphonie von Beethoven?
Ja, ich (höre) schon mehrere, im Radio oder auf dem Grammophon.
15. Im letzten Sommer (machen) ich eine Reise nach Mandschukuo. Ich (aufhalten, 分離動詞) mich einige Zeit in Charbin, (bleiben) aber die meiste Zeit in Mukden.
16. Letztes Jahr (haben) wir einen strengen Winter. Der Schnee (liegen) fast einen Meter tief und der Frost (dauern) ungewöhnlich lange. Auch (haben) wir einige sehr schwere Stürme.
17. Noch vor fünfzig Jahren (sein) es keine Kleinigkeit, krank zu sein. Man (kennen) damals weder Narkose noch Desinfektionsmittel.
18. Mein Vater (erkranken) auf seiner Reise nach Sapporo in Kyoto. Meine Mutter (abreisen, 分離動詞) daher heute Morgen dorthin.
19. Damals (haben) ich noch keine Ski. Wenn ich am Samstag Nachmittag meine Kameraden in die Berge fahren (sehen), (sein) mir immer truarig zu Mute.
20. Heute Nacht (ausbrechen, 分離動詞) ganz in meiner Nachbarschaft ein Feuer. Ich (schlafen) deshalb schlecht.

和文獨譯練習

次の語句を利用せよ。

verlassen & 4. Fall	er ist so freundlich und...
einholen (分離動詞) & 4. Fall	die chirurgische Abteilung
anreden (分離動詞) & 4. Fall	die Bequemlichkeiten von
besteigen & 4. Fall (einen Berg)	heute
(steigen, oder) gehen & auf & 4. Fall	die Bücherei
(besteigen は高山へ登山する場合にのみ用ひ、其他は大抵 gehen auf を用ひる)	das Warenhaus (Kaufhaus)
zur Verfügung stellen	in der Umgebung
untergehen (die Sonne) (分離)	zur Kur
nachlaufen & 3. Fall (分離)	auf der Bühne
zugefrieren (分離)	in früheren Zeiten
die Todesstrafe ruht auf & 3. Fall	bei meinem Freunde, bei ihrer Tochter —の處に (で)
wie geht es & 3. Fall	hoffentlich 大抵文の冒頭に おく
	alle の次は複數
	ganz の次は單數

1. 貴方は既にいつか寶塚に行つたことがありますか。
2. 私が家に歸つた時、誰も(そこに)居なかつた。
3. 今晚私の兩親は留守です、二人共芝居見物に行きました。
4. 私は長いこと子供の後を追つて走つたが、併しもはや追付かなかつた。
5. その時代には今日の便利なものはなかつた (Es gibt 又は man hat を用ふ) 街路の状態は悪く交通は少なかつた。

6. 私は今朝大層早く起きそして野原を通つて散歩した。
7. 子供達は今なほ歸らない、多分彼等に何事も起らないと思ふが。
8. 私の隣の方は大層親切で、彼の蔵書の全部を私に自由に使はせてくれた。
9. K はもう町へ行つてしまつたか。
10. 私の父は以前には毎年一回療養の爲め別府に行つた。
11. 彼は決して散歩せぬらしい。私は未だ一度も公園で彼に出逢つたことがない。
12. 吾々が山の頂上に着いた時丁度日が没した。黄昏は谷を掩ひそして數分後には上の方も亦暗かつた。
13. 貴方は未だシルレルの戯曲を舞臺で見たことはありませんか。
14. 私の兄は昨日 N 温泉で偶然以前の先生に出逢つた。
15. 私の母は數週間その長女の處に居て、昨晚漸く歸つて來た。
16. 昔は僅少の罪に對する刑罰は今日より遙に苛酷であつた、竊盜には屢々死刑が科せられた。
17. 外科の醫長 (der Vorstand) は去る九月に獨逸に行つた。
18. 私は先月數冊の美しい書物を買つたが未だ一冊も讀まない。
19. あなたは富士山に登つたことがありますか。あなたは吾々の町の南の山に登つたことがありますか。
20. X 君はどうしておますか、ああ、彼はもう一年前に死にました。
21. 彼は、金を半月のうちに再び返すと私に約束した。
22. 大層寒くなつた、此の邊の池は皆凍つた。
23. 貴方はもう新しいデパートに行つたことがありますか。

24. 私の両親は以前には仙臺に住んでゐた、近頃札幌に移り、今では金澤に住んでゐる。
25. 船は今はもう確に横濱を出た。

第六章 代名詞に就いて

I

1. Du mußt dich beeilen; dein Zug geht um 8 Uhr 15 und er wartet nicht auf dich. Deine Eltern werden sich über deine Ankunft freuen. Hast du ein Telegramm an sie abgeschickt? Ich hoffe, daß du bei Zeiten daran gedacht hast.
2. Ah, Sie sind wieder hier! Ist Ihre Familie auch wieder zurück? Geht es allen gut? — Oh, danke! Alle sind gesund. Aber unser Karl muß heute zu Hause bleiben, er hat sich in den Finger geschnitten.
3. Mein Freund ist am 15. April nach Europa gegangen. Vor seiner Abreise besuchte er alle seine Freunde und Bekannten.

a) 代名詞の全體の意義を明かにする上に参考となることは、獨逸語では、短い文章の中で同一の語は成るべく繰返さないといふことである。例へば Die Sonne geht im Osten auf und (geht) im Westen unter. の如く、後の geht は省略する。又自明の語は省略されることが多い。例へば上例の Ist Ihre Familie auch zurück? の如く zurück といふ方向の副詞により、その

意味は明かであるから、kommen (此處では gekommen) の如き語は省略される。其他 er will fort, dort muß ich hin の如し、此の原則は代名詞の使用される根據であり、例へば上例 1. に於て、der Zug の代りに er を、Eltern の代りに sie を用ひるのである。

b) 第二人稱には普通 du (複數 ihr) 又は Sie が用ひられるが、du を用ひるのは、凡そ十三四歳迄の子供に對する時、親子夫婦等の家族間及近親、又は親友の間等であり、其他は大部分 Sie を用ひる。上例の 1. は叔父か叔母かその甥又は姪にでも話してゐる場合と考へてよく、2. は特に親友といふ程ではない二人の大人の間の話である。

c) 前置詞 (mit, an, in, durch, vor, für 等) と共に用ひられる代名詞に就て注意すべきことは、唯人間又は動物に關する場合にのみ代名詞がそのまま用ひられる。例へばein Telegramm **an sie** abgeschickt..... 併しその代名詞が物に關する場合、又は es 或は das の時は、damit, daran, darin, dadurch, davor, dafür 等結合した形を用ひる。例へばdaß du beizeiten daran gedacht hast. それ故 daran 等は an das 等の短縮であるのみならず物を指す ihn, sie, es 等と an 等の短縮でもある。但し woran, womit, wodurch 等は唯 was に就てのみ用ひる形である。

代名詞の位置に關して注意すべきことは、人代名詞は、先行の名詞を指すが故に成る可く文の始めの方に置くべきものである。殊に代名詞が前置詞を伴はぬ場合には尙ほ更である。例へば Du mußt **dich** beeilen....., 併し Hast du ein Telegramm **an sie** abgeschickt? 同じ意味の文章でも Hast du **ihnen** ein Telegramm geschickt? とすれば代名詞の位置は異なる。

d) 物主代名詞は特に注意を要する場合が多い。第三人稱(sein, ihr) の場合は、日本語では表現されないことが多いのに反し獨逸語では之を明かにすることが多いことに注意する必要がある。例へば日本語で「旅行の前に彼はもう一度友人や親類を訪問した」といふのを獨逸語では、Vor **seiner** Reise besuchte er noch einmal **seine** Freunde und Verwandten といふ。此の場合定冠詞を用ひて、Vor **der** Reise..... とするのは、次に例へば二格の名詞の來るとき、即ち Vor der Reise meines Freundes とするときに限るのが普通である。然るに、かゝる二格の名詞による重複を避ける爲めに物主代名詞を用ひるのである。獨逸語を讀む際にも時々此の物主代名詞を用ひてある理由を顧慮するがよろしい。

明かに物主代名詞を必要とする場合に次の如きものがある、即ち例へば或る人を Freund と稱するのは、他に一人の人間を豫想することであり、又同じく Lehrer と稱するには、それに対する Schüler を豫想することである。かゝる際に獨逸語では物主代名詞を用ひる、例へば Ich habe gestern **meinen** alten Lehrer getroffen. **Mein** Vater hat alle **seine** Freunde verloren. 特に親類關係に於てこれを用ひる。即ち der Vater.....**den** Sohn ではなく、der Vater.....**seinen** Sohn であり、Die Eltern..... **die** Kinder ではなく、die Eltern.....**ihre** Kinder である。同様にして前置詞を伴ふ句、例へば Japan **mit seiner** langgestreckten Küstenlinie..... 又、Goethe **mit seinem** durchdringenden Geist..... 等、(これらの **mit** は例へば、Japan, das seine.....Küstenlinie hat を簡略したものである。尙 wir erkennen die Pilger **an ihrer** besonderen Tracht 等も此の一例である。)

物主代名詞は決して「所有」を表すのではない、尤も *deine Eltern* といふ時は、*die Eltern, die du hast* の意味であるが、*dein Zug* といふ時はお前の乗つてゆく汽車の意味であることはいふ迄もない。同様に *deine Fahrkarte* は、お前が必要の切符の意味である。

unser (従つて *Ihr, euer* も含めて) が家や家族に属する人や物に關する時注意すべきことは、例へば *うちの Karl* といふのは獨逸語で *unser Karl* といふ。

e) 身體の部分を表はす名詞にあつては、今迄述べたことと反對に多く定冠詞を用ひる。例へば *Er nickte mit dem Kopf* で、又、日本語で物主代名詞の如くいふ處は獨逸語では三格又は四格を用ひることが多い、例へば *Ich drückte ihm die Hand* (=seinen Hand). 又、*Er hat sich in den Finger geschnitten.*

f) *alle* と *jeder* は大抵の場合いづれを用ひても大した誤りはないが、*alle* は全體を表し *jeder* に於ては、全體の各個に就て考へる。*alle* が複數で、次に名詞を缺く時は *alle Menschen* の意味であり、*jeder* に於ても同様である。上例の *geht es allen gut?* の *alle* はあなたの家族のすべての意味であり、もし *obwohl jeder einen Schnupfen hatte* といへば家族の各々(が代る代る)の意味である。注意すべきことは *alle* は複數の動詞と、併し *jeder* は單數の動詞と結ぶことである。

Familie, Volk, Nation 等の集合名詞は獨逸語では、それらが單數形ならば常に單數の動詞を以て文を構成する。例へば *Ist Ihre Familie auch schon wieder zurück?* *Familie* は複數の人間を一個の全體に統一してある意味から單數として扱ふのである。

g) 獨逸語の特色の一つとして、*Mensch* と、*Ding* の二つの名詞は或る特定の場面の外は餘り用ひない。大抵は名詞を用ひず、人間の場合は *ein Kranker* とか、*derjenige, welcher.....* とか、又は *alle, jeder* 等を用ひ、物の場合は中性單數の形で、例へば *das Gute* (=das gute Ding, 或は *die guten Dinge*) 又は *etwas Gutes* (=ein gutes Ding). 等を用ひ、又、*all Dinge* の代りに *alles* を用ひる。其他 *das Folgende* 或は冠詞を省いて *folgendes* 等。

以上に關係して注意すべき二三の語の區別を記すと、*Mensch* は動物や、植物と相對する種類としての人間であり、*Leute* は或一定の場所に日常生活を行つてゐる人々である。(街上、家庭内、劇場内等々) 英語の *man* と混同して *Mann* を *Mensch* の代りに用ひてはならない、*Mann* は *Frau* と相對して男であることを表す。

II

1. *Man bleibt besser zu Hause, wenn einem nicht wohl ist.*
2. *Wenn man Geld hat, so kann man manches erreichen.*
3. *Der Frühling und der Herbst hat seine Freuden: dieser gibt Früchte, jener Blumen.*
4. *Da er seinen kleinen Neffen liebte, so beschenkte er diesen bei jeder Gelegenheit.*

a) *man* (小文字であり、*n* が一つであることを注意して *Mann* と混同せぬやう注意せねばならぬ。) は屢々用ひられる代名詞で、一般に大多數の人間を指し、又、特に主語として、それが誰であ

るかを明示する必要のない、或は明示したくない場合に用ひられる。従つて日本語で主語を省略する場合、或は受働形でいふやうな場合に多く用ひられる。man は一格のみであり、二、三、四格は einer の二、三、四格、即ち eines, einem, einen を用ひる、上例 1. 参照)。又 man は繰返す際 er を用ひず、常に man を繰返す。

b) dieser (diese, dieses) と jener (jene, jenes) も屢々用ひられ、上例 3. の如く前者、後者の意味で用ひられる時もあり、又、dieser, diese, dieses 等は 4. の如く、一番近い名詞(勿論、性と数の一致してゐるもの)を意味することもある。

練 習 問 題

次の文章を適当な語を以て補へ。

1. Jed...Kind lernt...Muttersprache durch...Ohr von ...Eltern, ...Geschwistern und von...Umgebung.
2. Der Redner sagte zuerst einige Worte über... Werdegang. Diese kurz...Worte sicherten das Interesse...Zuhörer (2. F. Pl.) für den ganzen Abend.
3. Friedrich der Große erfüllte alle Pflichten, die... (3. F.)...königliche Würde auferlegte, mit der größten Gewissenhaftigkeit.
4. Die Not blickt diesen Menschen aus...Augen.
5. Jene...unglücklich...Jahr bedeutete für den jung... Mann einen Wendepunkt in...Leben.

6. Künstlerische Leistung empfängt...Glanz aus der Form, ...Inhalt aber aus dem Menschlichen.
7. Es ist immer gut, wenn...(Subjekt) zur Erlernung fremder Sprachen...Ausland gehen kann.
8. Heute waren viele Leute in der Kirche...(Subj.) konnte wieder einmal sehen, daß der Mensch mit ...metaphysischen Bedürfnis nicht allein bleiben kann und will.
9. Erinnerst du...noch an das große Erdbeben in Kanto? Bei jen...schrecklich...Katastrophe verlor mein Onkel...ganz...Vermögen.
10. Ohne Zweifel hat die Medizin außer...wissenschaftlichen Entwicklung noch eine andere Grundlage, die...(3. F.) eine große Würde sichert. Das ist...Beruf, nützlich und hilfreich zu sein.

和 文 獨 譯 練 習

次の語句を利用せよ。

arbeiten an & 3. F. (仕事を しつゝある意味)	sich gern an etwas (4. F.) erinnern
sich bewußt sein (2. F.)	sich beschäftigen mit...
sich unterhalten mit...	sich freuen über...
sich wenig interessieren	sich die Haare schneiden
sich gewöhnen & Infinitiv	lassen

so freundlich sein und...
 Klavier üben
 nach Belieben wechseln
 ein Stück Kuchen annehmen
 in kleinen Verhältnissen leben
 sein Auskommen finden
 seinen Willen durchsetzen
 ...besteht darin, daß...
 ...tut mir leid, daß
 die Seinen (seine Angehörigen)

bewaldete Höhen
 die Heilkraft einer heissen Quelle
 Einkäufe
 die Haltung eines Menschen
 Fürsten der Feudalzeit
 vorsichtig in...
 besorgt um einen Menschen
 kurz hinter einander
 am nächsten Sonntag

1. 私は姪に美しい着物を贈らう、彼女はそれを喜ぶだらう。
2. 私の小さい弟は毎日二時間ピアノを練習する。
3. 一人の人間を全く理解することは難しい。
4. 吾々は遅刻したので恥しかった、他の人は皆既に坐つてゐた。
5. 眞の道德は悪を識つてしかも之を行はぬ處にある。
6. 父が不在で貴方が今彼に面談出来ぬことはお氣の毒です。
7. 賢い主婦は何よりもその買物に注意する。
8. 私は今朝非常に面白いことを聞いた。
9. 私は今町へ行つて散髪をしようと思ふ。
10. 吾々は皆同じ生活を體驗し、しかも、吾々の一人々々が各自の人生觀を持つてゐる。
11. うちの一番小さいのが昨日から少し病氣だ。
12. 獨逸では各學生はその大學の選擇が自由である、彼は任意に學期から學期へと大學を代へることが出来る。

13. 世の中に全くの悪人はない、そのことを私はこれらの人達に於てもまた見た。
14. 私の伯父は今でこそ貧乏世帯で暮してゐるが、その祖先は大名であつた。
15. 諸君に、直ぐ席に就て下さるやう御願ひします。(manを主語とせよ)
16. あの古い家で私の弟と妹が生れた。
17. 氣に入つたもののみを買へばよい。
18. 此の町にも亦、殆んど収入のない (findenを用ふ) 貧乏人が多い。
19. 吾々は若いうちに苦痛に堪へる習慣をつける必要がある。
20. 此の時間には各自が何かを獨逸語で言はねばならぬ。
21. 娘を御紹介致します、妻の死以來娘は専ら家事に従事してゐます。
22. 數年前私は、「會議は踊る」 („Der Kongreß tanzt“) といふ映畫を見た。私は今でも尙よくそれを思出す。
23. なほ一キロメートル行くと一つの園亭の所に來ます、そこで休息出來ます、又簡単な食事もとれます。
24. 多く人は常々善い事を行はんと欲する。併し彼等は必ずしもその意志通り行ふことは出来ない。
25. 私の家族は私の外に妻と三人の子供から成る。
26. すべての日本の學生は、互に似通つてゐる制服を着てゐる。
27. 全國民がその責任を自覺してゐなければならぬ。
28. その男のすべてが上品であつた、服装も、態度も、言葉も、聲も。
29. 夏には人々は、その家の前に腰かけて隣の人々と雑談をしてゐる。

30. 各自その祖國の爲に死ぬ覺悟がなければならぬ、併しそれはいざといふ時にのみ行はれるのだ。
31. 私はあなたのお子さんに菓子を一切上げやうとしましたが、子供さんは恥しがつてそれを受取ることをためらひました。
32. お前は伯父さんに何をお願いするつもりか、——私は、伯父さんから私の誕生日の贈物を貰ひたいのですが。
33. 暫く前に私は妹を失つた、私は度々彼女のことを思はずには居られない。
34. あなたは先生への手紙を何で書きましたか？何、鉛筆で？それはいけない、それは非常に失禮です。
35. 近頃私は二三の獨逸の小説を讀んだ、それは私には少なからず興味があつた。
36. 親愛なる友よ、君は一ヶ月以來便りを呉れない、私は君のことを非常に心配してゐる。
37. さようなら！次の日曜日にあなたを又御訪ねするつもりです。
38. 私の小さい弟は、手にきれいなナイフを持つて、それで丁度彼の鉛筆を削つてゐた。
39. 私は新橋で急行列車に乗り、十時間後京都で又降りる。
40. 私が昨日君を誘ひに君の所に行つた時、君はもう居なかつた。——どうも失禮した、私は、手紙を本局に持つて行かうと思つたので少し早く出なければならなかつたのだ。
41. どうかその本を私に貸して頂けませんか、明日は御返しいたすでせうから。
42. 私の友人はその家族と共に、病氣によく効くので有名な温泉に短い旅行をする。
43. 私がよく思出す氣持のよい景色は、周圍に森の茂つた丘のある故郷の村である。

第七章 關係文章に就いて

1. Ich habe hier zwei Photographien von mir, eine alte und eine neue. Möchten Sie lieber die alte oder die neue? ...Die eine wurde vor drei Jahren aufgenommen, die andere in der vorigen Woche. Möchten Sie lieber die Photographie haben, welche vor drei Jahren aufgenommen wurde, oder die, welche gestern aufgenommen wurde?
2. Die Leute, die (oder: Diejenigen, welche) immer zu allem ja und amen sagen, haben wenig Urteilskraft oder sie sind charakterlos. ...Es sind schon Leute zu mir gekommen, die mir alte Familienstücke zum Kauf anboten.
3. In der Jugendzeit meines Großvaters — er wurde im Jahre 1866 geboren — war Japan noch gegen die übrige Welt abgeschlossen. In der Zeit, als mein Großvater geboren wurde, kannte man noch keine Eisenbahn, keine Telegraphie, kein Luftschiff und kein Radio.
4. Das Haus, in welchem meine Mutter geboren wurde, ist das größte im Dorf. ...In dem Haus, wo sie geboren wurde, verbrachte auch ich einen großen Teil meiner Jugend.

5. Alles, was ich bis jetzt berichtet habe, können Sie ruhig weiter erzählen. Aber alles, worüber ich jetzt sprechen werde, bitte ich Sie geheim zu halten. Die Gefahren, mit denen (welchen) wir rechnen müssen, zwingen uns zur Vorsicht.

a) 関係文章は副文章の一種である。副文章は元來獨立した思想を表現するのではなく、主文章の内部にあつて附隨的思想を表するのである。此の附隨的な思想を本文の中に Gedankenstrich や括弧で包んで挿入するのはむしろ稀な方法である。上例の meines Großvaters — er wurde im Jahre 1866 geboren — war Japan..... の文に於ても、祖父が何時生れたか、主要の問題でなく、祖父の生れた當時の日本に就ての文章である。正式にはmeines Großvaters, der im Jahre 1866 geboren wurde, war Japan..... と書く處である。

今述べたとは別な徑路で関係文章が成立する場合がある。上例の寫眞に就ての文章を見ると、最初は二つの寫眞といふ名詞を形容する附加語は eine alte und eine neue である。次にある Die eine wurde vor drei Jahren aufgenommen, die andere in der vorigen Woche は全體が二つの寫眞といふ名詞を説明する附加語文章と見られる。即ち動詞を含む附加語文章は関係文章の形をとることになる。尙かゝる場合 die vor 3 Jahren aufgenommene Photographie といふ構造は避けた方がよい。之は拙い獨逸語であり、科學論文等に於て長い文章の中に簡単な構造の句をいくつか續ける場合の外には、稀な構造である。又能動と受動との使ひ分にも初學者には間違ひを生じ易い構造である。

b) 関係代名詞の格を正しく示す爲には、少くとも最初のうちは、関係文章とする文章を先づ主文章につくつて見るのがよい。

例へばGroßvaters — er wurde im Jahre 1866 geboren — war..... といふ風に。er であるから関係代名詞としても一格で單數であることは明かである、即ち der (welcher) である。別の例をとれば、Der Baum — wir saßen im letzten Sommer oft unter ihm — ist umgehauen worden から Der Baum, unter welchem wir im letzten Sommer oft saßen, ist umgehauen worden. 更にもう一つ例をとつて説明すれば、Der Baum — wir saßen im letzten Sommer oft in seinem Schatten — ist umgehauen worden. この in seinem Schatten は即ち in des Bauses Schatten であり。従つて関係代名詞 der の二格 dessen を用ひて、Der Baum, in dessen Schatten wir im letzten Sommer oft saßen, ist umgehauen worden となる。

c) 関係文章内の語の位置に就て注意すべきことは、すべての副文章の場合と同様定動詞(變化した動詞)は文の最後におかれる。他の場合に文末におかれる過去分詞や不定法は定動詞の直前におかれる。

d) 冠詞に關しては、関係代名詞の受ける名詞は、一般の規則に従ふ。特に注意すべきことは、Diejenigen, welche (die), 或は die Leute, welche (die) は常に、alle Leute, welche..... の意であり、Leute, welche (die) 或は Menschen, welche (die)..... (即ち無冠詞) は常に Solche Menschen, welche の意である。同様に Derjenige, welcher..... は Jeder Mensch, welcher の意であり、Ein Mensch, der (welcher)..... 或は Einer, der..... は Ein solcher Mensch, der..... の意である。

e) 関係代名詞の特殊な形として was がある。之は併し etwas, alles, das (指示代名詞、アクセントを付けて發音する)の後に用ひられ、又 das Beste, was..... 等の用ひ方もあり、又前の文章全體又はその一部(動詞)を受ける。此の was に限り前置

詞と結合して *worin, womit, worüber, wozu* 等の形となる。他の普通の関係代名詞ではかゝる形は用ひられない。例へば *alles, worüber ich jetzt sprechen werde.....* は *über was* の代りであるが、併し *die Gefahren, mit denen* は *womit* にすることは出来ない。

f) 関係文章の前には名詞の代りに屢々指示代名詞 *derjenige* (或は *der*), *diejenige (die)*, *dasjenige (das)* が置かれる。此の *der, die, das* は定冠詞と異なりアクセントを付けて發音する。例へば *.....oder die, welche gestern aufgenommen wurde.* 又 *Das, was ich bis jetzt berichtet habe,.....* (*Dasjenige Ding, welches.....* の意である)。

g) 時や所を示す名詞の後に來る関係代名詞で *in, an* を伴ふものに就て注意すべきことは、その名詞が関係代名詞と同様の前置詞 (*in, an*) を伴ふ場合は、その関係代名詞は *wo* となることである。例へば *Das Haus, in welchem meine Mutter.....* の場合は別に問題はないが、*In dem Haus, wo (=in welchem) sie geboren wurde* では *in* が直ぐ又繰返されるのを避けて *wo* を用ひる。又 *In der Zeit, als mein Großvater.....* の如く時を表すとき(過去)は *wo* の代りに *als* を用ふることもある。同様に *Fall* の後に — *in Fällen, wo* (併し *in dem Falle, daß.....*)、又 *der Grund, warum (=aus welchem). die Art und Weise, wie (=in welcher)* 等の云ひ方もある。

h) 関係文章が動詞として單に *sein* を持つ場合関係代名詞と *sein* とを省略していはゆる *Apposition* (同格) を用ひることがある。例へば *Mein Onkel, welcher Professor an der Universität Tokyo ist, fährt nach Hokkaido.* の代りに *Mein Onkel, Professor an der Universität Tokyo, fährt.....* とする。

i) 主文章の語の配列に就て此處に追加しておくことは、既に述べた如く主語が第一に來ると、副詞が第一に來るとに拘らず定動詞は第二番目に來る。併し何かの理由から主語を第一に置かず、又第一におくべき副詞もない場合は、文章を *es* を以て始める。此の *es* は所謂文法上主語で、文章の意味には全然關係がない。例へば *Es sind schon Leute zu mir gekommen, welche.....* 即ち *sind* は定動詞で *Leute* が主語であり、此の *Leute* を関係文章に成るべく近く置く爲に *es* を以て文章を始めるのである。

構造の練習

次の文章から主文章と関係文章をつくれ。

1. Ich habe eine Nachricht für dich; sie wird dich sehr freuen.
2. Ich habe eine Nachricht für dich; du wirst dich sehr darüber (über sie) freuen.
3. Ich habe dir etwas mitgebracht; es wird dir Freude machen.
4. Ich habe dir etwas mitgebracht; du wirst dich darüber freuen.
5. Weißt du, wem der Füllfederhalter...du hast ihn gestern gefunden...gehört?
6. Ein neuerliches Fehlschlagen meiner Pläne ist das Schlimmste; (aber) es könnte mir passieren.
7. Die Pilger...man erkennt sie leicht an ihrer Tracht

...wandern besonders im Frühling von Tempel zu Tempel.

8. Die Tracht...die Pilger tragen sie gewöhnlich auf ihren Wanderungen...ist im ganzen Lande so ziemlich dieselbe.
9. Die Pilger...man begegnet ihnen besonders häufig im Frühling...erkennt man leicht an ihrer Tracht.
10. Den Pilgern...sie ziehen von Tempel zu Tempel und ihre (der Pilger) Tracht ist leicht zu erkennen ...begegnet man besonders häufig im Frühjahr.
11. Er bat um einen kurzen Urlaub; dieser wurde ihm auch genehmigt.
12. Er bat, für kurze Zeit nach Hause gehen zu dürfen; dies wurde ihm auch genehmigt.

和文獨譯練習

(先づ構造をよく考へよ)

次の語句を利用せよ。

die Strecke von ... nach ...	für...halten
zurücklegen	es liegt in der Natur der Menschen, ...
so wenig...wie...	von...Schlechtes sprechen
bereit sein...zu...	ein scharfes Ohr haben
studieren auf der Universität	seine Autorität geltend machen
sich freuen über...	

sich gegen...abschließen	Menschenopfer
seine Kräfte in den Dienst seines Volks stellen	Beziehungen
die Idee einer endlichen Welt	Kehlkopf
durch...erworben werden	Zusammenpassen
außer acht lassen	Einzelwesen
in Frage kommen	Elastizität
sich bedienen...(2. Fall)	Druck
gegen...schützen	Oberhaut
durch...bestimmt sein	Lichtstrahlen
genügen, um...zu...	schwächere Sterne
die Leute des Kolumbus eine Rolle spielen	Skorbut
die Errungenschaften der Zivilisation	Weltwirtschaft
Expreszug	die Wilden
schonen	das gemeine Volk
der Ausgang	Drüsen
hochschätzen	herstellen
sich anschaffen	Staatengebilde
Mundart	enthüllen
Pferdebahn	Fahrzeug
Gebildete	aushalten
Schwerhörigkeit	Neger
Ironie	Sichtbarkeit
aufweisen	das Vitamin C
	Zitrone
	Eingeborener
	aufdrängen

1. 東京大阪間を八時間で走る特急「燕」は我國で最も早い汽車である。
2. 青森生れのうちの女中は、屢々その故郷の方言を使ふが、私はそれが外國語と同じ位分らない。(aus)
3. 今日街上で、その名をもう覚えてゐない男が私に挨拶した。
4. あなたが今一緒に話してゐた婦人は誰ですか。
5. 多くの母親にとつてその子供は、その爲には喜んですべてを犠牲にする寶である。
6. 吾々は着物、靴、書物や吾々に屬するあらゆる物を大切にせねばならぬ。
7. 吾々は此の教授の講義を好んで聽く、何となれば彼は吾々が正に彼から聽きたい多くのことをいふから。
8. 私の父は東京に尙鐵道馬車のあつた時代に東京帝大の學生であつた。
9. 此の夏、私は北海道へ旅行の途中私が幼年時代を過した町を通つた。
10. 吾々が住んでゐる家は五十年前祖父が建てたのだ。
11. 入學試験後の結果がどうなるか確かでない、あの待つてゐる時が私は嫌だ。
12. 私はお前に或る新しいことを話して上げよう、お前はそれを聞いて多分喜ぶだらう。
13. 時間が如何に貴重かを知らぬ人を教養ある人と見なすことは出来ない。
14. 自分に気に入ることは又眞でもあると考へるのは人情である。
15. 金錢を最も輕蔑するように見えて、しかも實際は最も尊重する人々が多い。

16. 耳が遠いにも拘らず、自分の惡口に對しては早耳を持つてゐる人々がある。
17. それをみんな讀む時間もなく讀む氣もないのに書物を次々と買ひ入れる人々がある。
18. 辛辣ではあるがしかも誰をも傷けない種類の皮肉がある。
19. 私は田舎に住んではゐるけれども、私の友人が多く住んでゐる此の町に屢々やつてくる。
20. 近代の飛行機は大きな進歩を示してゐるが、それは勿論無数の人命を犠牲にした。
21. 或る程度に注意して獨逸と伊太利を旅行する者は、疑なく伊太利の風景と獨逸のそれとの間の差違に氣がつくであらう。
22. 是は東京がなほ江戸と呼ばれ、將軍がその威を逞しうしてゐた時代の物語である。
23. 日本が鎖國してゐた時代にはオランダは、歐洲の文化を我國に輸入する唯一の國であつた。
24. 彼の一生の最も楽しき日は、國民の爲に盡力することの出來た日であつた。
25. ライン河は、河として値打のあるすべてのことを併せ持つてゐる。
26. 最初人間が地上に出現した時代を思ひ浮べることは實に難かしい。
27. 吾々が最大の注意を拂はねばならぬのは往々最小の事物である。
28. それはお前の爲し得る最善である。
29. 彼が私に之等すべての約束をした手紙を私は残念ながら失つた。(手紙をから始めよ)
30. 人間の精神生活と肉體生活との間に存在する關係は未だ解けぬ謎である。

31. 重要な Hormon である、所謂 Thyroxin をつくる二つの腺は喉頭の両側にある。
32. 有限の宇宙の観念は、無限の宇宙の観念よりも、多分吾々が今まで宇宙に就て知つてゐる所によく一致する。
33. 昆蟲には、何十萬、恐らく何百萬といふ個體が團結してゐる國家形體がある。
34. 一時間 250 キロメートルの速さで行ける鐵道が數年前スコットランドでつくられた。
35. 農業は副産物として問題になるものは何一つ無視してはならない。
36. 深海の調査に使用する船舶は劇しい壓力に堪へなければならぬ。
37. 黒人の皮膚の中につくられる色素は、皮膚と身體とを太陽の餘りに強い光線に對して保護する役目を持つてゐる。
38. 吾々の望遠鏡の力でその見えることが確定してゐる巨大な數の星の外に、當分の間吾々には見えない光の弱い星も勿論ある。
39. 壞血病を豫防する爲に極めて少量で足りるビタミンCはレモンの汁に特に豊富に含まれてゐる。
40. 二つの小さな島の間でコロンブスの一行は土人が一人の乗つてゐるボートに出會つた。
41. そのボートの底に横たはつてゐた乾いた葉は、次第に世界經濟のうちにあのやうな巨大な役割を演ずることになつた煙草であつた。
42. かつては、アフリカの所謂野蠻人達に吾々の文明の成果を押しつけなければならぬと信じた時代があつた。

第八章 Daß..... と不定法に就いて

A. (Daß...)

Es ist bekannt, daß die ersten Menschen etwa gleichzeitig in Java, in China und bei Heidelberg auftraten. (Daß die ersten Menschen...auftraten, ist bekannt). Wir glauben heute, daß die ursprüngliche Heimat des Menschen Innerasien war, und Abel spricht die Vermutung aus, daß schon bei der ersten Abwanderung aus Innerasien die Hauptunterschiede der verschiedenen Menschenstämme vorhanden waren. Verschiedene Anzeichen weisen darauf hin, daß es damals schon heller und dunkler gefärbte Menschen gab.

B. (Infinitiv)

Es war zuerst meine Absicht, einen oder zwei Tage in Osaka zu bleiben; ich gedachte dort einen alten Schulfreund zu besuchen. Im Zug aber traf ich einen Vetter von mir, der darauf bestand, daß ich ihn nach Hause begleite (der mich bat, ihn nach Hause zu begleiten), damit er mir sein neues Haus zeigen könne. Um nicht unhöflich zu sein, ging ich mit ihm und schließlich hinderten mich verschiedene Umstände (daran), mein ursprüngliches Vorhaben auszuführen.

Daß に始る副文章と不定法と此の二つの使ひ方は獨逸語の重要な特徴の一つを成すもので、意味の混亂を避ける爲には此の使ひ分けをよく了解する必要がある。

Daß に始る副文章は、何かの(現實の或は想像上の)事實、事件、行爲等を表し、それに対して或る人間が主観的に或る立場をとるのである。それ故二つの要素があつて、一つは考へ或は感ずる人間(主文章)、もう一つは人間の判断の對象となる事實或は事件(Daß の副文章)である。例へば上例の *Wir glauben heute, daß die ursprüngliche Heimat des Menschen Innerasien war.* に於て *Innerasien ist die ursprüngliche Heimat des Menschen* は一つの事實であつて *Wir glauben das* が人間の此の事實に対する判断である。(場合によつては反對に *Wir leugnen das* ともなる)。

人間の主観的な判断は非人稱的な表現等によつても一般的に表される。例へば *Es ist bekannt, daß.....* は *man weiß allgemein, daß.....* 又は *Die Menschen wissen im allgemein, daß.....* 等に等しい。又名詞によつて、例へば *Die Vermutung, daß.....* 等とすることもある。例へば *hinweisen auf.....* の如く前置詞を後に伴ふ動詞に就て注意すべきことは、かゝる動詞の次に *daß* の副文章が來るとき前置詞は *da* 又は *dar** と結ばれて *weisen darauf hin, daß.....* となる。併し此の形は必ずしも總ての場合に必要ではなく、例へば *Ich erinnere mich daran, daß.....* の代りに *Ich erinnere mich, daß.....* と書くのが普通である。(名詞の前では常に *Ich erinnere mich an.....* である。如何なる場合に此の *daran* の如き副詞を省略してよく、或は必要とするかは獨逸文を注意して讀むうちに徐々に會得し得るであらう)。

上に述べた構造の文章が往々 *Daß.....* を以て始り、主文章がその後が続くことがある。例へば *Daß die ersten Menschenauftraten, ist bekannt.*

* *da(r)* は元來 *das* である。

不定法の場合は以上と違ふ。不定法は本來は名詞である。そのことは、その前に大抵 *zu* といふ前置詞を伴ふことから考へられる。此の *zu* は同時に、不定法にあつては、或る行爲への方向に向ふ意を表すことを示してゐる。何となれば、*zu* は元來方向(Richtung)の意味である。*Ich gedachte, dort einen alten Schulfreund zu besuchen* は「私の考へは訪問の方向に向つて動いてゐる」といふことである。即ち不定法の用ひられるのは、動詞の表す行爲を目的とする動向、意志、願望、努力等を示す場合である。(之と上に述べた *Daß.....* を用ひる場合とを比較せよ)。その動向を表す動詞が三格、四格の名詞又は代名詞を後に伴ふとき、不定法は大抵その名詞或は代名詞に關する。例へば *Mein Vetter bat mich, ihn zu begleiten*, 又動詞を表すものが名詞である場合もある、そして不定法はそれに従ふ附加語の形となる。例へば *Meine Absicht,zu bleiben.*

不定法の名詞的性質から、不定法にそれ自身の主語を附することは許されない。即ち *Ich gedachte: ich besuche* を *Ich gedachte zu besuchen* とするわけである。勿論例へば *Ich wünsche: mein Bruder soll besuchen* と考へる場合もあるが、その時は不定法を用ひ得ない。不定法に *mein Bruder* といふ主語を附することが出来ない故に此の場合は *daß* を用ひて *Ich wünsche, daß mein Bruder besucht* とするより仕方がない。同様に例にある如く *Mein Vetter bestand darauf (där darauf bestand), daß ich ihn begleite.* (英語の *He insisted on me going with him.* の如き構造は獨逸語では全く不可能である)かゝる如き場合、即ち *darauf bestehen* や *wünschen* に三格或は四格の代名詞(或は名詞)をとつて、例へば *Ich wünsche meinen Bruder zu besuchen* と書くことは、意味を異にする文章となり、従つて *Ich wünsche, daß mein Bruder.....* の代りにならぬこ

とに注意しなければならぬ。併し bitten は四格をとり得ること上に記した通りである。

Daß の副文章の場合と等しく、不定法を用ひる場合も前の動詞に前置詞を伴ふ時は da(r) と結合する。例へば Verschiedene Umstände hinderten mich **an** der Ausführung meines ersten Vorhabens. であるが、之を不定法とすれば、.....hinderten mich **daran**, mein erstes Vorhaben auszuführen となる。此の際ung の語尾を持つ行為の名詞は成るべく避け、動詞或は不定法を用ひるを可とする。即ちdaran — auszuführen の方が an der Ausführung より遙かによい。又 Daß..... の場合と同様 da(r) と結合する前置詞は屢々省略される。即ちhinderten mich, mein erstes Vorhaben auszuführen. 所謂助動詞 können, sollen, wollen, werden, müssen, dürfen, mögen の後に來る不定法は zu をとらない。例へばer kann mir **zeigen**,er mir zeigen kann.

次に目的を表す不定法 (um.....zu) に就て述べて置く。例へば Ich bin hierher gekommen といふ文章は完結した文章であるが更に之に對して何故に、何の目的でと尋ねることも出来る。その答は Ich bin hierher gekommen, weil ich das neue Haus sehen wollte. 或は Ich bin hierher gekommen, **um** das neue Haus zu sehen とすることが出来る。此の um.....zu は目的を表す副詞に相當する。そして先に述べた如く不定法にはそれ自身の主語は附せられぬが故に此の場合、sehen の主語は Ich bin.....の主語たる Ich である。即ち Ich will sehen の意味である。併し此の不定法の動詞の主語が初の動詞の主語以外のものときは、不定法は成立しないことは勿論である。即ちその場合は damit を以てする副文章をつくる。例へば**ich** komme mit, **damit** mein Ve ter(er) mir das neue Haus zeigen könne.

ohne daß と ohne+不定法, anstatt daß と anstatt+不定法の關係も同様である。

damit の副文章の動詞は現在の場合には多くは直接法を使ふが、過去の場合は接続法を使ふ。

不定法の構造に於て意志、努力等の意味を二重に表してはならない。例へば die Absicht.....bleiben zu **wollen** の如きは誤である。即ち wollen の意味は既に Absicht に含まれてゐる。

和 文 獨 譯 練 習

次の語句を利用すべし。

es ist nicht lange her,	sich des Vertrauens...auf...
daß...	versichern
zu einer Verständigung	sich zur Aufnahme in eine
kommen	Schule melden
großes Aufsehen erregen	auf...stolz sein
zur Post tragen	in eine Seidennadel ein-
einschreiben lassen	fadeln
seinen Lebensunterhalt	es kommt zum Krieg
sichern	auf...Gewicht legen
um jeden Preis	eine Entwicklung nehmen
sein Glück versuchen	es kommt einem darauf an
sich der Abstimmung	beschränkte Verhältnisse
enthalten	auf...verzichten
chauvinistische Strömung	das Studium bezahlen
mit sich bringen	zu Hause lassen
das Parlament auflösen	sein Glück machen
Privatunterricht nehmen	einen Todesstoß erhalten

in dem politischen Wirrwarr	Intelligenz
um...ringen	auseinanderhalten
mit äußerster Hingabe	es gilt heute...
mit zu...gehören	Hausaufgabe
sich auf...(4. Fall) besinnen	Betragen
mit...begnügen	herunterziehen
einem Konzert beiwohnen	Gewerbe
...läßt sich dadurch er- klären	Preissteigerung
es besteht kein Zweifel	Meteorstein
sich die Mühe nehmen	Gemütsleben
zu seinem Teil	Formal-Demokratie
Rundfunkstation	Bestandteile
Wahlberechtigter	Stadthalle
Bildungsniveau	Mondkrater
Ministerpräsident	Kalifornien
Produktionskräfte	Dokortitel
Landesverteidigung	die technische Hochschule
ausgeschlossen	humanistisch
dahinwelken	befolgen
Tugendheld	halbflüssig
gleichberechtigt	Sterblichkeitsziffer
unzerstörbar	Handelshochschule
mit Recht	Nervnfunktion
	Bildungsideal

1. 此の町に放送局が開設されたのはさう前のことではない。
2. 日本とアメリカの間の現在の困難な関係に拘らず、兩國の間には間もなく了解が成立すると彼は信じてゐる。

3. 日本の飛行機の神風が、九十四時間で東京からロンドンへ飛んだといふ報告は世界中に大きなセンセーションを惹起した。
4. 彼の意見は結局、日米間の親善関係は當分不可能であるといふ處にある。
5. 彼は、友達と映畫を見に行く代りに、家に止つて宿題をしなければならぬ。
6. 私の父は、此の手紙を直ぐ郵便局に持つて行つて書留にして貰へと私に命じた。
7. 政府は、國民の生活を安定させる爲にあらゆることを試みるであらうと約束する。
8. 今や此の困難を征服する爲に吾々の全力を盡すことが大切である。
9. 彼は、是が非でも滿洲國に行つてそこで一と旗上げるのだと頑張つてゐる。
10. 政府は、今度は有権者は一人も棄権せぬやうにと望んでゐる。
11. アメリカは今や全力を擧げて我が海軍を凌駕しようと努めてゐる。
12. 僕は君を侮辱しようといふ積りは少しもない。唯僕は君にその態度を反省するやうに願ひするのだ。
13. 一般の排外思潮に伴ふ最悪の影響は、教養の水準がそれによつて低下するといふことである。
14. 大臣達は、國民の内閣に對する信任を確める爲に議會を解散することを首相に提議した。
15. 彼は父に相談せずに高等學校に入學を志願した。
16. お前の父は、お前が大學を卒へたら直ぐ歸郷して彼の商賣を續けることを望んでゐる。
17. 彼は學校へも行かず、又個人教授も受けずに獨逸語、英語、佛蘭西語を習得した。

18. 金を早く貰ふ爲に彼は母に手紙を書く代りに直接父に電報を打つた。
19. 國內の産業を促進する爲には外交政策をも考へることが必要である。
20. 物價騰貴を出来る限り阻止する一手段として生産力の増加が要望されてゐる。
21. 國防を安全にする爲には、國民の生計がその爲に反つて脅されることのないやうに顧慮しなければならない。
22. 私の八十になる祖母は、なほ眼鏡なしに絹針に糸を通すことの出来るのを自慢してゐる。
23. 隕石が人間に命中することは殆んど有り得ないことに思はれる。併しそれは 9300 年に一度はあるとのことである。
24. 近き將來に日米間に戦争が起るやうな事のないとはいひきれない。
25. 診察の後に醫師は、そんなに運動をすることは私には危険であると言明した。
26. 國民が衰亡しない爲にはその情操生活が健全な發達をすることも重要視しなければならない。
27. 私は決して金を儲けることなど考へてゐるのではなく、私にとつて重要なことは政界で名を成すことである。
28. 私は今やうちの窮迫した暮し向きが分つたので、父に私の學資をこれ以上出して貰ふことは斷念せねばならぬ
29. 私は、かゝる状態の下で私の仕事を續ける氣はない。
30. 商人として成功する爲には君子たらんとする野心を放棄すべきものだといふ彼は信じてゐる。
31. 獨逸では、形式的民主主義は世界戦争の終末によつて致命傷を受けたといふことに關しては何の疑も持つてゐない。
32. 現代の政治的混亂の中にあつて他の諸國民は、今日の獨逸で

- は人間生活の最も深い、最も困難な問題に屬する諸問題に關して一生懸命に奮闘してゐることを全く見逃してゐる。
33. 同等の資格で他の諸國民の間に伍さんとする國民の第一の任務は、自身の精神の固有の要素を想起することである。
 34. 最初は學問は、資料を蒐集し、検査し、整頓し、分類することで満足しなければならぬ。
 35. 彼は最初は、日本アルプスで一週間過す目的であつた。併し此の計畫を實行することは彼には不可能であつた。
 36. 猿に關する近來の觀察は、彼等が高度の知能を所有してゐる。即ち、彼等が、異なる事物の間に存在する關係を理解するといふことを示してゐる。
 37. 目に見える星の數も大きな公會堂で音樂會に集つた人々の數より多くはないとは容易に信じられない。
 38. 月の噴火口は、巨大な隕石が、全く或は半ば液狀の月の表面に墜ちたことによつて生じたのかも知れない。
 39. カリフォルニアはすばらしい風土にも拘らず、その死亡率の高いのは特殊なことである。併しその事は、特に比較的老年のものがそこへ行くといふことで説明が附く。
 40. かなり後になつて漸く工業大學や商業大學が Doktor の學位を授ける權利を獲得した。
 41. 腦や神經機能にとつて非常に重要な物質である Lezithin が、卵の中にかなり多量に含まれてゐることは、未だ十分に知られてゐない。
 42. 人文的な教育理想が凡そ二世代の間獨逸を支配してゐたが、併し、十九世紀の後半にはもはや實際には行はれてゐなかつたことは疑がない。
 43. 吾々は各々今や自己の分だけ、國民の偉大なる仕事を助成する爲に力を盡すべき時だといふ事を感じてゐる。

昭和16年9月15日 初版印刷
昭和16年9月18日 初版發行

獨語初步・不許複製



◎ 正價金 60 錢

編 者 山 岡 直 道
日本出版文化協會會員番號 121004
發 行 者 鈴 木 幹 太
東京市本郷區龍岡町35番地
印 刷 者 大 門 甚 吉
東京市神田區三崎町2丁目22番地
印 刷 所 參 成 堂 印 刷 所
東京市神田區三崎町2丁目22番地

發 行 所 南 山 堂 書 店
東京市本郷區龍岡町31番地
電話小石川 423, 4757 振替東京 6358 番
配 給 元 日 本 出 版 配 給 株 式 會 社
東京市神田區淡路町2丁目9番地

<p>初恋 ツルゲニエフ 原作 浦和高校教授 上村静淵譯 價 .90 郵 6</p>	<p>世の中に初恋を忘れ得る者があろうか。初恋の主人公ペテロヴィツチは、四十歳の坂を越えて此夢の様な儂ない青春の喜びを西々に物語るのである。</p>
<p>散文詩 ツルゲニエフ 原作 文學士 三浦白水譯 價 .90 郵 6</p>	<p>これはツルゲニエフが或は日常生活の上に於て、或は書齋に於て自づから湧き来りし、感想、情緒等を美しき詩筆を以て綴つた短かい散文の集である。</p>
<p>三人姉妹 チエツホウフ 原作 姫路高校教授 湯淺温譯 價 .50 郵 6</p>	<p>行く春のやうな柔かい情味を混ぶる中に悲愴の響を宿すものはチエホウフの戯劇三人姉妹である。非凡人の凡化して行く悲哀、愛なき結婚、亡び行く生活、平坦な周旋を脱して華やかな都會を慕ふ心、生き甲斐ある生活に浴する心持、凡化する運命を堪りつつも振し得ない痛苦など、近代的苦悶の表現はパノラマの様に三人姉妹の中に展開する。蓋かこの作を讀んで心に共感を感ぜ得ない人があらう、故て一讀をこよ。</p>
<p>幽霊 イブセン 原作 明治大學教授 小野秀雄譯 價 .90 郵 6</p>	<p>巨匠の巨人イブセンが、「ノラ」に於て撰れたる遺傳子ドクトル、ラングの後半世を一つの挿話として脚色せし事は既に世人の熟知する所也、幽霊は即ち此挿話を一つの完全なる劇に仕組みしものである。</p>
<p>ヘッダ・ガーブレル イブセン 原作 明治大學教授 小野秀雄譯 價 1.00 郵 8</p>	<p>イブセンの社會劇中「ヘッダ・ガーブレル」はイブセンが晩年の1890年に書いたものである。彼が「ノラ」を書いたのは其の十年程前で婦人の保護者として熱烈なる筆を揮つたが、此劇を執筆する頃は「ノラ」によつて起した婦人解放問題も一息落を告げ、落付いて人生を眺められるようになった。彼は三角關係を従へ來つて現實の儘みを描出せんとした。人生に對する皮肉な微笑が此劇によくあらはれてゐる。</p>
<p>ドストエウスキー短篇集 浦和高校教授 上村静淵譯 價 1.00 郵 6</p>	<p>華やかな美々しい方面のみ人生を觀つのでなくして、常に陰鬱な處げられた埋れた裏面を洞視し閃光の如き鋭さと透徹さを入れてその裏底を洞察し、其處に眞の人生と歡喜と光明を見出し偉大なる人格の方によつて描かれたる作品は、單に露西亞ばかりでなく世界的に價值あるものである。</p>

<p>父 ストリンドベルヒ 原作 文學士 上野白柑子譯 價 .80 郵 6</p>	<p>夫婦の間に生れた子供に對しては何にも「我子」であるといふ自覺を持ち得るのは母親より外には無い。妻の生んだ子供に對して「父親」は母親と同様の自覺を持ち得るであらうか、ストリンドベルヒの大傑作「父」は即ち此大なる悲哀を脚色せしものにて、作の主人公は此悲哀の爲り裡き煩悶に陥り、學術を研究して此苦より救はれんとする中に、妻及び家族より責任者の取扱ひを受け、遂に悶死するに至るのである。</p>
<p>伯爵令嬢ユリイ ストリンドベルヒ 原作 文學士 天沼純村譯 價 .80 郵 6</p>	<p>ユリイ嬢は「父」と並び稱せらるるストリンドベルヒの傑作悲劇である。主人公ユリイ嬢は、輕卒我繼なる母の遺囑と父の誤れる教育との産物にて、威厳を深々とせるが故に其の許嫁の夫を棄て、偶然の舞會に召使と通じ共に墜落せんとして却つて自殺を迫らるるに至るのである。</p>
<p>サロメ ワイルド 原作 浦和高校教授 小野澤百八譯 價 .70 郵 4</p>	<p>「余は生ずの天分を擧げて余が生に注がんと叫びしオスカー・ワイルドが十九世紀文學界に「影を放てるは吾輩の暇を俵たざる所而して彼が近代的作家として著く喧傳せらるる所」は小説に「ドリアン、グレイ」も「戯曲に「サロメ」あるがためなり、然も彼が藝術的性質は實に「サロメ」一篇の内に融解し合せられし觀あり。</p>
<p>タウゲニヒツ アイヒエンドルフ 原作 迷陽 西田時政譯 價 1.00 郵 6</p>	<p>「タウゲニヒツ」は獨逸浪漫主義文學中の最大傑作と稱せられ作者アイヒエンドルフの名と共に永久に亡びざる大作たるは今更贊するの要無し。</p>
<p>力の關 トルストイ 原作 二高教授 佐久間政一譯 價 1.00 郵 6</p>	<p>本書は無知と迷信と淫慾に包まれたロシアの農村生活が主材である。農夫ニーキタの弱き性根と人間獸性は母と妻に引ずられて、難地獄に墜つた様に止め度もなく罪の深淵に墜つた。</p>
<p>力以上 ピョルソソ 原作 二高教授 佐久間政一譯 價 .80 郵 6</p>	<p>基督教とは一何であらう。そして所謂奇蹟とは何であらう歟。奇蹟の力が基督の眞體であるならば、今日でもなほそれを見たもの皆信じたりきと聖書にあるやうな、奇蹟をなす力が與へられないであらう歟。復活に對する「仰が、此教の眞諦であると説いても、斯う云ふ信仰は他の宗教にもあるのではあるまいか。</p>

<p>侵入者・群盲</p> <p>メーテルリンク原作 姫路高校教授 湯浅温譯 價 .90 郵 4</p>	<p>メーテルリンクの戯曲は現代藝術の最高點に達するものなり、その内面藝術たるを神秘と象徴と相錯する間を彩るに沈痛なる夢現的色彩を以てし、人をして心靈幽幻の境に彷徨し、恍惚として去る能はざらしむ、誠に人間心靈の最も貴重なる記録なり。</p>
<p>新聞記者</p> <p>フライタツハ原作 水戸高校教授 莊直一譯 價1.4 郵 8</p>	<p>獨逸で從來最も屢々好んで上演せられた喜劇と云へば此のフライタツハ氏の、「新聞記者」を推し得る。筋は選挙の葛藤を背景として新聞記者の謙ひな頑固の父の爲めに愛嬢の婚は危く犠牲とならんとする時奇策縦横の快男子と才智秀れた佳人の出現によつて敵も味方も見事翻弄し去られ戀人は目出度く愛人の懐に歸ると云ふ。</p>
<p>盲目のジェロニモとその兄</p> <p>シュニッツレル原作 補 高校教授 小野澤百八譯註 價 .90 郵 6</p>	<p>或日カルローは吹矢を射て遊んでゐると矢は折悪しく走り過ぎた弟ジェロニモの眼に中り弟は生れもつかぬ盲目となつた。それ以來カルローは従命不聞した間違とは云ひながら責任感と良心の呵責に堪へ兼ねていつその事自殺して贖罪しやうとした。</p>
<p>トニオ・クレーゲル</p> <p>トーマス・マン原作 文學士 六笠武生譯 價1.00 郵 6</p>	<p>Kurt Martens はこの作を評して「マンが常に繰返し用ひる俗人的氣質と藝術家氣質との矛盾乃至對比を取扱つた自叙傳的中篇小説でもつて、詩人の運進した或種の人間の特別な運命が悉く象徴化されてゐる。」</p>
<p>歌姫</p> <p>ハウフ原作 文學士 高階彬天譯 價 .90 郵 6</p>	<p>ハウフはその童話によつてよく知られてゐるがここに對譯した歌姫も亦彼の秀拔なる Erzählungstalent をよく窺はしむべき浪漫的な小説である。これは歌姫ピアネツチの数奇な運命に應はる殺人事件を主題にしたものである。</p>
<p>ユーディット</p> <p>ヘツベル原作 東京商大教授 吹田蘆風譯註 價1.2 郵 8</p>	<p>「ユーディット」は獨逸のイブセンと稱せらるゝ近代劇の宗師ヘツベルの處女作である。題材を舊約全書聖書より取り、猶太教對異教なる歴史的關係を背景として、男女兩性間の深刻なる葛藤を描いたものである。</p>

特252

920

終